

如何にして他人と繋がるか

鬱の蔓延

鬱のため講義や研究を欠席し、自宅に引き籠もる大学生が増加している。もし明確な自覚症状があるならば、心療内科等を受診し抗鬱薬を処方される。しかし、実際は重症患者に限って医療機関を受診しない。彼らは鬱の原因を無理矢理に捏造するが、真の原因は明確ではない。鬱の者の増加は、健全な同僚の負担となる。学生を鬱に追い込んだとして、教官が責められる。こうして鬱が鬱を増殖させる。最近まで快活だった人が、突如として鬱になる。誰にでも鬱になる可能性がある。鬱病は、細菌性の伝染病ではないが、確実に人から人へ伝染する。鬱の感染拡大の対策は難しい。たった一個の腐った林檎が林檎箱全部を腐らせる。我々教官は鬱の学生を忌み嫌い、自分の研究室から排除したくなる。しかし、たとえ排除したところで、大学に鬱の学生がいる限り、根本的な解決にはならない。鬱の学生は「教官から忌み嫌われている」ことを自覚し、鬱を増長させる。「医者が必要とするのは健常者ではなく病人である」とある。研究室の機能不全を覚悟してでも、積極的に鬱の学生を受け入れるべきだが・・・

人間関係の分裂・個人の心の中の分裂

大学生の個人個人の間で意思の疎通ができなくなっている。彼らは他人の視線をひどく気にする。「他人が自分をどう見ているのか」に対してのみに強い興味がある。一方で、「他人がどのような人物なのか」については興味がない。現在では、過半数の大学生が、いずれの部活動にも所属せず、講義の終了とともに帰宅する。メルトモはいるが、腹を割って語り合う仲ではない。友人関係が希薄である。大学生に家族について尋ねる。満足に自分の家族の話ができない学生がいる。家族で食卓を囲む機会がない。一家団欒の時間がない。家族との会話がな。よって、家族について知らない。そもそも家族に興味がないのである。

大学生は個人と個人との間のみならず、心の中が細かい断片に分裂している。その結果、自分自身を制御できない。学生には興味があり、自主的に勉強したい科目がない。他人から強要されて勉強する。よって可能な限り少ない労力で単位を取得できる講義科目を選ぶ。その場限りの瞬間的・刹那的な学習である。一度過去に修得したはずの事項を、数年後には全て忘れている。将来を見据えた長期的な視点がない。自分の過去と未来に対する関心がない。現在に対してのみに関心がある。過去や未来の自分と、現在の自分とが分裂している。その結果、学生は「パブロフの犬」の条件反射のようにしか、物事に対処することができない。論理を積み重ねることができない。論理的思考には、長時間の集中に耐えることが必要だが、大学生は、長時間の集中に耐えられない。長い時間をかけて、ゆっくりと進むことに耐えられない。論理思考力の欠如により数学・物理学を理解できないので、丸暗記する。短い作文さえもできない。条件反射だけで動作するスマホだけに没頭する。

我々年輩の世代もまた、上記と同様の問題を抱えている。森有正の著作に「経験」が登場する。セーヌ川を遡上する伝馬船は、一見止まっているようでも、いつかは視界から消えてゆく。数百年をかけて大聖堂の石が積み上げられていく。「他人と繋がる」や「過去・未来の自分と繋がる」という「経験」のためには、ゆっくりと流れる時間が必要である。ところが、現代に生きる我々には「経験」がない。エンデの「モモ」にあるように、絶えず時間に追われている。短期間に成果を要求される。熟慮が許されない。矢のように時間が飛び去っていく現代では、他人とも自分自身とも繋がるのが難しい。人間

関係も、個人の心の中も細かい断片に分裂する。いくら、物質的には豊かでも、心が分裂しているのならば、心は豊かではない。創世記にあるバベルの塔の人々と同様に、我々もまた分裂の危機に瀕している。

学生と繋がる

大学生と繋がるのは、家族とつながるよりも難しい。なぜなら学生は大学入学まで、わたしとは別の人生を歩んできたからである。大学の研究室に所属する学生ひとりひとりのことを、心の片隅で思い続ける。学生に期待しない。学生から精神的に独立・自立する。大学生は朝・昼・晩の3度の食事を満身に食べていない。食事は栄養バランスに乏しい。そもそも食事に興味がない。そこで、定期的に研究室全員で野菜・肉を購入し調理する。皆で食卓を囲む経験をさせる。特に、鬱の学生のことを絶えず思い、電子メールを送り続ける。季節の挨拶など、とりとめのない内容に止める。「研究室へ出てきて下さい」や「出てこない卒業させない」などと脅さない。要求を最小限度に止める。背負う重荷を可能な限り軽くしてやる。もちろん返事は来ないが、送り続ける。堅く閉ざされた門を、軽くそっとノックする。強く激しく叩かない。学生の鬱からの回復はほとんど期待できないが、「貴方のことを思っている」という態度を持続する。

家族と繋がる

わたしは、長女誕生の直後から現在に至るまで20年間近くも単身赴任を続けている。週末毎に妻子に住んでいる自宅へ帰省する。別居していても、心の片隅で絶えず妻子ひとりひとりのことを思い続ける。妻子は今何をしているのだろうか？何を考えているのだろうか？などと脳裏に思い描く。週末には、毎食必ず家族揃って食卓を囲む。子供たちの学校の文化祭、部活動の発表会に家族揃って出席する。季節毎に家族旅行をする。子供の夏休みの自由研究に協力する。子供が受験生の時には、一緒に試験問題を解いてみる。子供が解ける問題でも、自分が解けなかつたりすることもあるが・・・子供に怒られて追い出されても、子供の受験勉強の最中に、わざわざ机上を覗きこむ。子供の世話・しつけ・教育に励む妻の一步後ろから眺める。妻が子供を叱っているときには、陰で優しく宥めて、子供に逃げ道を作る。妻の自由な裁量に任せ、詳細な点まで干渉しないが、子供の教育に関心のあることを示し続ける。しかし、妻子に見返りを期待してはいけない。妻子から精神的に独立・自立していなければいけない。